

教育のユニバーサルデザイン。 藤沢で始まった「支援教育」とは。

みんなの学校

いま話題になっているドキュメンタリーに、「みんなの学校」という映画があります。大阪にある大空小学校という学校の1年間を記録した映画です。

この学校では、障がいのある子やすぐに暴力をふるってしまう子、学校から逃げ出してしまう子なども、みな同じクラスで共に学んでいます。目標は「不登校ゼロ」です。

先生たちは、他の子が嫌がることをした子どもにはきわめて厳しく接します。でも同時に、「その子がなぜそんなことを



映画「みんなの学校」より

したのか」と、つねに考えようとしています。

それをせず一方的に子どもを怒鳴りつけた若い先生が、先輩たちから厳しくたしなめられる場面も出てきます。

すぐに学校から逃げ出してしまう子どもが転校してきました。前の学校で先生たちがみな頭を抱えていた、有名な「問題児」でした。

ところがある出来事がきっかけで、その子がすっかり落ち着いて、教室に座るようになります。そのことについて、校長先生がこう話します。

「あの子は何も変わっていない。みんなの、あの子に対する見方が変わったんだ。だから、学校があの子にとって安心できる場所になったんだ。」

「みんな」が安心して通える学校。その結果としての「不登校ゼロ」なのです。

私も先日この映画を見ましたが、少し恥ずかしくなりました。私はこんなに丁寧に子どもたちに接してきたらどうか……

インクルーシブな（子どもたちを包み込む）学校とはこんな学校なのだと、ヒントを与えてくれる映画だったと思います。

「問題行動」とは何だろう

大空小学校の先生たちは、子どもの起こす「問題

の背景に、子どものどんな気持ちがあるのかを常に考えようとしていました。

「問題行動」という言葉があります。これは実際には教師の側から見て「問題」のある「困った」子ども、という意味です。文部科学省の分類では、暴力行為などだけでなく「不登校」も「問題行動」でした。

でも、今ではどの学校も「不登校」を簡単に「問題行動」とは片付けません。

もし「いじめ」によって学校が辛くなった子がいたとしたら、「問題」があるのはその子ではなく、いじめのある学校の側ではないか……多くの学校は、そのように考えるようになりました。

では、授業に集中せず、騒いだり立歩いたりする子はどうでしょうか。

その子は、なぜ落ち着かないのでしょうか。もしかしたらその子は勉強につまづいていて、授業がわからず、じっと座っているのが辛いのもかもしれません。だとしたら、そんな授業の側にも「問題」があるのではないか……そんなふうには考えられないのでしょうか。

「困った子」とは、何でしょう。「教師にとって、困った子」のことでしょうか。

そうではなく、障がいや国籍の違いだったり、家庭のさまざまな問題や、勉強がわからない、自分に自信が持てないなどという「子どもにとっての困りごと」こそが「問題」なのだと視点を転換すれば、また違った子どもへのかかわり方が見えてくるのではないのでしょうか。

藤沢の「支援教育」

藤沢市教育委員会はこの4月から、「支援教育」を藤沢の教育方針に位置づけました。

この「支援教育」について、吉田早苗教育長は6月の市議会でこんなふうに説明をされました。

教育委員会ではこれまで、一人ひとりの困りごとに応じた支援・指導を「特別支援教育」として推進してきました。しかし「特別支援教育」とい

言葉は、障がいのある子どもへの支援・指導と捉えられることもあり、これまでの「特別支援教育」の考え方を、より大きな概念で捉える「支援教育」に改めるよう整理をし、「特別支援教育」を包含するものとなりました。

「支援教育」の考え方は、「ともに学びともに育つ」教育をめざし、障がいの「ある」「なし」にかかわらず、一人ひとりの困りごとに応じた支援・指導を行うことです。

つまり「支援教育」とは、これまで特別支援学校や特別支援学級が培ってきた「個別指導」の手法を、学校教育全体にも広げようとするものなのです。

「たった一人の問題にかかわっていたら、きりがなし」という声もあるでしょう。

ですが、私は「支援教育」とは教育の「ユニバーサルデザイン」なのだと思います。

白浜養護学校の校長先生だった阿久澤栄さんは、その著書でこんなふうにおっしゃっています。

「教員自身が今まで行ってきたやり方にこだわらずに、子どもたちの教育ニーズに合わせて授業を

柔軟に組み立て直せばそれは結果的に学校のすべての子どもたちの学習指導も着実に進めることにつながります。障害の疑われる子どもたちが理解しやすい学習指導は、他の子どもたちにとっても理解しやすいからです。（「特別支援教育は『特別』なの？」玉川大学出版部刊 より）」

「ひとり」を大切にすることは、「みんな」を大切にすることにつながる。

大空小学校のめざしていた「みんなの学校」の「みんな」とは、そのようなことなのだと思います。

「多忙化」の解消にもとりくもう

そうは言っても、日々の対応に追われる学校現場の「支援教育の理念はわかるけれど、これ以上の仕事は限界だよ」という切実な声も無視はできません。

「支援教育」の理念を実現するには、同時に「人」の配置や「多忙化解消」など、教育条件整備を進めることもぜひ必要です。

6月の議会で私は「支援教育の理念は大切だと思う。ただ、同時に教職員の多忙化の解消にも取り組むべきだ」と質しました。

これに対して吉住潤教育部長は、こんなふうに答弁されました。

教員の超過勤務の抑制につきましては、心身の健康維持、能率的な業務遂行の確保、ワーク・ライフ・バランスの推進等の観点からも必要であると考えています。

現在、学校においては勤務時間外に及び業務が多くあり、早く帰ることができないという実態がありますが、教育委員会としましては超過勤務を抑制するために、……今後は教職員へのアンケート等を行い、多忙な状況の要因の把握に努め、多忙化を解消するための方策を検討していきます。

教育委員会から「超過勤務の抑制が必要」と答弁があったことは、大きな意味があります。

教育委員会もすでに小学校の給食費の公金化、校務支援システムの導入（これはまだ問題がありますが…）など、具体策をとりはじめています。看護師資格を持った介助員も全国に先駆けて配置しました。

折しも文部科学省も「チーム学校」という研究プロジェクトを立ち上げ、「校内の役割分担を見直し、教員が子どもたちのことに専念できる体制をつくる」方向を打ち出しました。

「多忙化解消」は、誰もが願っていながら実現の難しかった課題です。私は「支援教育」が始まる今こそ、「多忙化解消」にも本格的にとりくむ機会とする必要があると思います。

当面、労働安全衛生委員会を設置して多忙の要因の分析を行い、第三者の視点で超過勤務抑制に向けた提言を求めることを検討すべきでしょう。

「学校だけが抱えない」ことが大切

「支援教育」とは、別の見方で言えば「早期支援」です。問題が深刻になってから対策に奔走するより、もっと早期に支援をした方が解決につながるし、本当はその方が先生たちの労力も少なく済むはずです。

私は「支援教育」と「多忙化解消」を両立させる鍵は、「担任や学校だけで抱えない」ことだと思います。

発達障がいを抱える子どもへの対応には、一定の専門的知識も欠かせません。子どもの貧困の解決には、福祉への接続や保護者への支援も必要になります。

こうしたとき、県立田奈高校など「支援教育」の実践をすでに進めている学校では、スクールソーシャルワーカーの手を借りたり、養護学校の地域支援を使ったりして生徒を支援し、解決にとりくんでいます。

「支援教育」の成否の鍵をにぎるのは抽象論ではありません。「目の前の子どもたちの事実を語り合う」教育実践の積み上げと、教育条件整備であるはずで

